

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

蓮見元子* ・川嶋健太郎**
北原靖子*** ・浅井義弘****

The Results of a Survey on Primary School Teachers' Consciousness to the After-School Activities

Motoko HASUMI, Kentaro KAWASHIMA, Yasuko KITAHARA, Yoshihiro ASAI

要 旨

「放課後子ども教室」は、放課後の子どもたちの安全・安心な居場所とするべく、平成19年から全国ほぼすべての公立小学校に設置する方針で始まった新規事業である。本報告は、子どもたちに日々接している小学校の教員に1)放課後の子どもの過ごし方について、2)放課後の子どもの居場所について、3)放課後子ども教室について、それぞれどのように考えているのか、小学校の先生方の「放課後の子どもの生活」についての現状認識、あるいは望んでいることなどから放課後というもう一つの学校の持つ意義や機能について明らかにすることを目的として、アンケート調査を行った。調査協力者は、我孫子市立小学校13校に勤務する教員で、そのうち、記入漏れの個所のない有効回答169名(男性70名、女性99名)を分析対象とした。放課後の子どもの過ごし方として、能動的・動的な活動がよいと考えているが、実際は受動的・静的な活動が多いのではないかと捉えていた。総じて放課後の子どもたちの生活については関心があったが、放課後の居場所として、親も子どもも安心できる見守りの「場」で、そこには複数の子どもたちがいて、さまざまな体験が出来る「場」を考えていた。子どもが放課後、能動的・動的に過ごそうとすると「放課後子ども教室」のような出入りが自由で、好きなときに行ける子どもの体験学習を旨とするような「場」が必要となることが示唆された。

キーワード：放課後の過ごし方、教員意識、アンケート調査、小学生

*教授 発達心理学
**講師 学習心理学
***教授 発達心理学
****教授 臨床心理学

I 問題と目的

千葉県我孫子市では、小学校区に1つ以上ある学童保育室に加え、校区の全児童が利用可能な放課後子ども教室を第一小学校内に平成19年度創設し、学童保育室との一体化運営を模索してきた。2年間の検討を重ね、いよいよ今年度より我孫子市立第一小学校で一体化運営が始まった。そして、第一小学校での検証を元に、「放課後子どもプラン」を推進すべく来年度以降市立小学校での放課後子ども教室の増設と学童保育室との一体化運営を目指している。筆者らは我孫子市立第一小学校に併設された「放課後子ども教室」(あびっ子クラブ)に対して、開設時より、有識者として、あるいは調査者として、あるいは地域の見守りサポーターを行う学生を輩出する大学の教員として参画し、よりよい放課後の子どもの居場所づくりをめざすべく様々な提案を行ってきた。

これらの放課後子ども施設がより実りあるものとなるためには、参加する子どものみならず、保護者、現場教職員、ボランティアといった関係者それぞれの意見をとりまとめ、目標および評価指標を定めた上で、定期的に評価を行い、運営を改善していくことが必要であろう。よりよいサービスを求める保護者に対して、予算と制度の制約の下で運営を行う行政、仕事の負担と責任が重い現場の教職員、やりがいを求めているボランティア、自由に家で一人で過ごした方がよいと考える児童がいるなかで、互いの中で意見が異なるのは当然といえる。

かつては、子どもたちには地域の空き地などで異年齢集団で遊び、その遊び集団を通して社会性などが育まれる「もうひとつの学校」があった。しかし、高度成長期を境に子どもの外遊びの場が失われ、情報化社会の進展などに伴う子どもの遊びの変容とともに、群れ遊ぶ子どもたちの姿がみられなくなった。さらに共働きの家庭が増加し、昼間留守家庭の子どもが増加している今日、放課後、地域で、子どもたちのための安全で適切な育ちの場の確保が急務となっている。

「放課後子ども教室」は、放課後の子どもたちの安全・安心な居場所とするべく、平成19年から全国ほぼすべての公立小学校に設置する方針で始まった新規事業である。それらに関連する心理学的研究は、筆者らの研究(蓮見, 2009, 北原, 2009, 川嶋, 2009)の他にはまだほとんどない。他方、「子どもの居場所」についての研究は、心理学、建築学、社会学などの分野からのものがあり、心理的機能の構造については杉本・庄司(2006)の研究がある。杉本・庄司(2006)によると、居場所の心理的機能には被受容感、精神的安心、行動の自由、思考・内省、自己肯定感、他者からの自由の6因子があり、小学生では「家族のいる居場所」、中・高校生では「自分一人の居場所」を自分の居場所と考えている子どもが多いことを明らかにした。

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

本研究は、子どもたちに日々接している小学校の先生方に1) 放課後の子どもの過ごし方について、2) 放課後の子どもの居場所について、3) 放課後子ども教室について、それぞれどのように考えているのか、アンケート調査を行い、小学校の先生方の「放課後の子どもの生活」についての現状認識、あるいは望んでいることなどから放課後というもう一つの学校の持つ意義や機能について明らかにすることを目的とした。

Ⅱ 方法

1 調査協力者

我孫子市立小学校 13 校に勤務する全教員 453 名に調査票を配布したところ、288 名 (63.6%) の回答があった。そのうち、記入漏れの個所のない有効回答 169 名 (男性 70 名、女性 99 名) を今回の分析対象とした。

教職年数は 5 年未満 54 名、6～10 年 14 名、11～15 年 4 名、16～20 年 8 名、21～30 年 49 名、31 年以上 40 名。担任を持っている教員は 125 名、担任を持っていない教員が 44 名。さらに、担任の学年・あるいはよく知っている子どもの学年は 1 年生 23 名、2 年生 18 名、3 年生 27 名、4 年生 25 名、5 年生 31 名、6 年生 43 名であった。

2 調査の時期と方法

平成 21 年 7 月 16 日に各小学校に先生の人数分の調査用紙を配布し、約 20 日の記入期間を経て、回収した。

材料：インターネットにより配信され作成することのできる SQS のマークシート方式の質問紙。放課後の子どもの過ごし方、放課後の子どもの居場所、放課後子ども教室などについての教員意識を知るための質問項目を独自に作成した。

3 調査の内容

質問紙はフェイスシートと以下の項目から構成されていた。フェイスシート以外は 5 件法による回答方法であった。

1. フェイスシート
2. 放課後の子どもの過ごし方についての質問 20 項目 (望ましさの程度と現状ありうる程度についてたずねたもの)

3. 放課後の子どもの居場所についての質問 23 項目（望ましさの程度と現状ありうる程度についてたずねたもの）
4. 放課後の子どもの過ごし方についての質問 5 項目（当てはまる程度をたずねたもの）
5. 放課後子ども教室についての質問 13 項目（当てはまる程度をたずねたもの）
6. 放課後の子どもの居場所についての質問 16 項目（当てはまる程度をたずねたもの）

4 分析方法

(1) 「放課後の子どもの過ごし方」に関する各質問項目の評定平均値を算出した。評定平均値の降順で各項目を並べ替え、どの項目に示される活動が望ましいと考えているのか、また、その活動が現状ありうる程度はどのくらいであると考えているのか、望ましいと考えている程度と、現状ありうる程度との差異はどのようなものであるか、について見た。

(2) 先生方を【教職年数の短い先生と教職年数の長い先生】【男性の先生と女性の先生】【低学年、中学年、および高学年の担任の先生】の 2 つないし 3 つのグループに分け、それぞれのグループごとに「放課後の子どもの過ごし方」についての各項目の評定平均値を出し、t 検定ないし分散分析による群間の平均値の差の検定を行った。

(3) 「放課後の子どもの過ごし方」「放課後の子どもの居場所」「放課後子ども教室」の 3 つの質問項目群をそれぞれ因子分析（主因子法・バリマックス回転）によって次元分解し、「放課後の子どもの過ごし方」、「放課後の子どもの居場所」、「放課後子ども教室」を因子に分けた。因子ごとに評定平均値を算出し、【教職年数の短い先生と教職年数の長い先生】【男性の先生と女性の先生】【低学年、中学年、および高学年の担任の先生】において、因子間の平均値に差異があるかを t 検定および分散分析を行い示した。なお、統計的処理には統計ソフト SPSSVer.17 を使用した。

(4) 因子分析によって得られた下位項目群間の関連性について、パス解析を行い、もっとも適合的なパス図を示した。

Ⅲ 結果と考察

1. 放課後の子どもの過ごし方

1) 「放課後の子どもの過ごし方」について望んでいる程度

放課後の子どもの過ごし方について望んでいる程度を 5 件法で回答を求め、必要不可欠 = 5, 望ましい = 4, どちらでもない = 3, やや望ましくない = 2, 望ましくない = 1 とし、各項

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

目の平均値を算出した。図1に示す。平均値の高かったのは「外で体を動かす遊びをすること」、「読書をする事」、「たくさんの子と一緒に遊ぶこと」、「別の学年の子と一緒に遊ぶこと」、「自分でどんどん新しい遊びを見つけること」、「自分自身で遊びを創意工夫すること」、「鬼ごっこなどの伝統的な外での遊びをすること」、「近所のお年寄りの話を聞いたり、一緒に遊んだりすること」などの項目であった。

先生方は能動的・動的で、充実した子どもたちの放課後の生活を望んでいた。

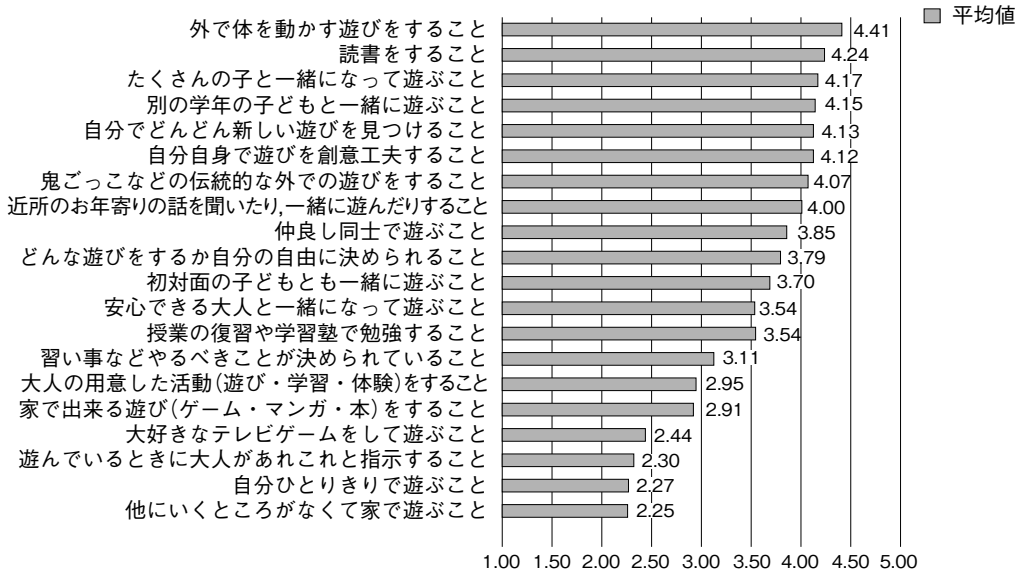


図1 放課後の子どもの過ごし方として望んでいること

2) 「放課後の子どもの過ごし方」について現状ありうと思う程度

実際には、子どもたちはどのようなことをして放課後を過ごしていると先生方は考えているだろうか。放課後の子どもの過ごし方について、上記と同じ項目について、どのくらいありうと思うかを5件法で回答を求め、かなりある=5、ややある=4、どちらでもない=3、あまりない=2、ほとんどない=1として、各項目の平均値を算出した。

平均値の高かったのは「好きなテレビゲームをして遊ぶこと」、「仲よし同士で遊ぶこと」、「習い事などのやるべきことがきめられていること」、「家で出来る遊び(ゲーム・マンガ・本)をすること」、「他に行くところがなくて家で遊ぶこと」、「外で体を動かす遊びをすること」、「授業の復習や学習塾で勉強すること」、「自分ひとりきりで遊ぶこと」などの項目であった。その結果を図2に示す。

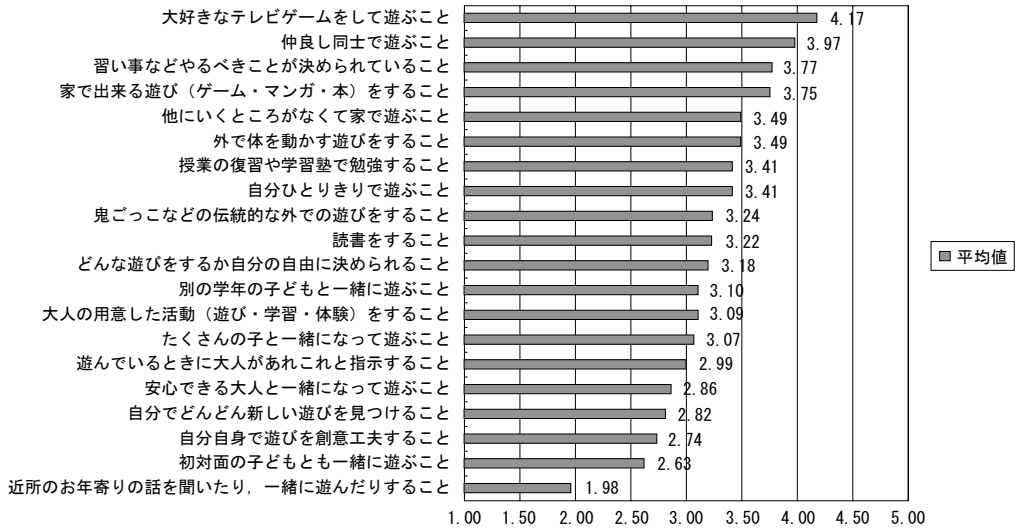


図2 放課後の子どもの過ごし方についての現状認識

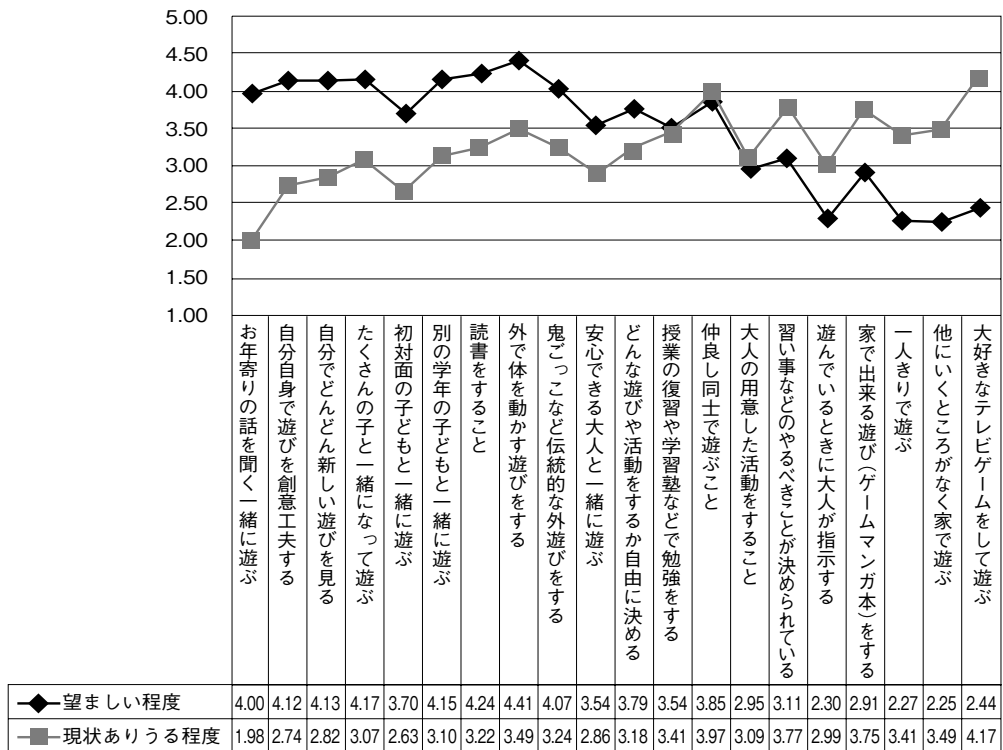


図3 望ましいと思う過ごし方と現状ありうると思う過ごし方の差異

3) 先生方が考える望ましい過ごし方と現状ありうる過ごし方の差異

図3に望ましいと思う過ごし方と現状ありうると思う過ごし方の差異を項目ごとに示した。「大好きなTVゲームをして遊ぶこと」「自分一人きりで遊ぶこと」「他に行くところがなくて家で遊ぶこと」「家でできる遊び(ゲーム・マンガ・本)をすること」といった過ごし方は、あまり望ましくない過ごし方であるが、実際にはそのようにすることが多いのではないかと考えている様子が伺えた。

「大人の用意した活動(遊び・学習・体験)をすること」「仲良し同士で遊ぶこと」「授業の復習や学習塾で勉強すること」では、望ましい程度と現状ありうる程度が一致していた。

逆に、「お年寄りの話を聞いたり、一緒に遊んだりすること」「自分自身で遊びを創意工夫すること」「自分でどんどん新しい遊びを見つけること」「たくさんの子と一緒に遊ぶこと」は、望ましいが現実にはそれほどしていないと受け止められていた。

放課後子どもたちは「他にあまり行くところがなく、ひとりきりで家で出来る遊びをすること」が多いと先生方は考えており、ギャングエイジと呼ばれ、徒党を組んで、野山や路地、空き地で遊んでいた小学生はもはや過去のものとなっているようであった。

子どもの放課後の過ごし方について、先生方に、「子どもの過ごし方は現状で問題ない」「子どもは放っておかれている」「子どもの放課後の過ごし方が気になる」という直接的な質問をしたところ以下のような回答であった。

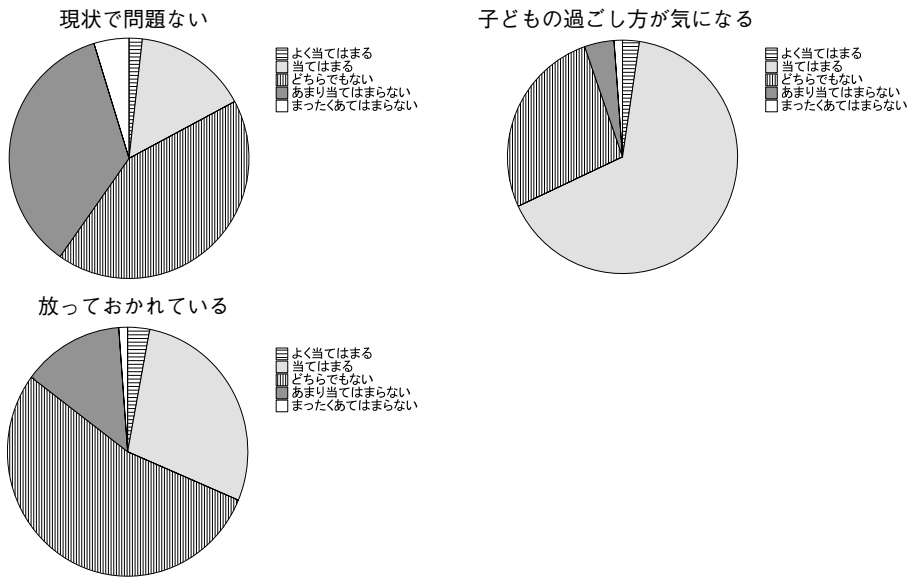


図4 放課後の子どもの過ごし方への関心

放課後の子どもたちの過ごし方について先生方は気になっており、子どもたちは放っておかれがちであり、現状ある程度の問題があると考えている、といった結果であった。

4) 小学生の放課後の過ごし方についての【教職年数の短い教員と教職年数の長い教員】【男性教員と女性教員】【低学年教員，中学年教員，および高学年教員】による意識の違い

①教職年数の短い教員と長い教員による意識の違い

放課後の子どもの過ごし方について、有意な差があった項目を表1に示す。「ひとりきりで遊ぶこと」「遊んでいる時に大人が指示や禁止すること」「大人の用意した活動をする事」「大

表1 教職の長短による教員の考え方の違い

望ましい程度		教職短い	教職長い	有意確率	差異
ひとりきりで遊ぶこと	平均 標準偏差	2.66 .891	2.01 .922	p<.01	短い>長い
遊んでいるときに大人が指示や禁止すること	平均 標準偏差	2.56 .799	2.12 .864	p<.01	短い>長い
大人の用意した活動をする事	平均 標準偏差	3.29 .734	2.72 .801	p<.01	短い>長い
初対面の子どもと一緒に遊ぶこと	平均 標準偏差	3.81 .553	3.62 .581	p<.05	短い>長い
大好きなテレビゲームをして遊ぶこと	平均 標準偏差	2.75 .655	2.23 .786	p<.01	短い>長い
家で出来る遊び(ゲーム・マンガ・本)をすること	平均 標準偏差	3.09 .640	2.79 .753	p<.01	短い>長い
現状ありうる程度		教職短い	教職長い	有意確率	差異
たくさんの子と一緒に遊ぶこと	平均 標準偏差	3.28 .826	2.93 1.098	p<.05	短い>長い
お年寄りの話を聞く一緒に遊ぶこと	平均 標準偏差	2.18 .913	1.84 .935	p<.05	短い>長い
自分でどんどん新しい遊びを見つけること	平均 標準偏差	3.06 .912	2.65 .865	p<.01	短い>長い
習い事などのやるべきことが決まっていること	平均 標準偏差	3.99 .763	3.62 .881	p<.01	短い>長い
どんな遊びや活動をするか自由に決められること	平均 標準偏差	3.34 .683	3.08 .833	p<.01	短い>長い
別の学年の子どもと一緒に遊ぶこと	平均 標準偏差	3.37 .862	2.92 .977	p<.05	短い>長い
鬼ごっこなど伝統的な外遊びをすること	平均 標準偏差	3.44 .835	3.11 .847	p<.01	短い>長い
自分自身で遊びを創意工夫すること	平均 標準偏差	2.93 .798	2.61 .848	p<.01	短い>長い
授業の復習や学習塾などで勉強をすること勉強すること	平均 標準偏差	3.57 .759	3.31 .845	p<.01	短い>長い

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

好きなテレビゲームをしてあそぶこと」「家で出来る遊び（ゲーム・マンガ・本）をすること」などは、教職の長いベテランの先生に比べ、教職の短い若い先生方は、それほど望ましくないことではないと考えていた。また、望ましい活動として平均点が高かった「たくさんの子どもと一緒に遊ぶこと」、「お年寄りの話を聞くこと」、「自分でどんどん新しい遊びを見つけること」、「別の学年の子どもと一緒に遊ぶこと」、「どんな活動をするか自由に決められること」などについては、ベテランの先生に比べ、若い先生の方が現状でありうるとした程度が高かった。

②男性教員と女性教員による意識の違い

項目ごとに男性教員と女性教員とで平均値を比べてみた場合、有意な差異のみられた項目は以下の表2のとおりであった。

男性教員は、「一人きりで遊ぶこと」、「大好きなテレビゲームをして遊ぶこと」、「家で出来る遊び（ゲーム・マンガ・本）をすること」などを女性教員ほど望ましくないとは思っていないようであった。また、「自分自身で遊びを創意工夫すること」「仲よし同士で遊ぶこと」について、女性教員にくらべ、より望ましいものとして評価していた。

表2 男性の教員と女性教員の意識の違い

望ましい程度		女性	男性	有意確率	t 値	差異
仲よし同士で遊ぶこと	平均	3.78	3.96	p<.05	2.01	女<男
	標準偏差	0.632	0.523			
一人きりで遊ぶこと	平均	2.14	2.46	p<.05	2.07	女<男
	標準偏差	0.892	1.031			
他にいくところがなく家で遊ぶこと	平均	2.14	2.41	p<.05	2.36	女<男
	標準偏差	0.729	0.752			
大好きなテレビゲームをして遊ぶこと	平均	2.26	2.69	p<.01	3.61	女<男
	標準偏差	0.723	0.79			
自分自身で遊びを創意工夫すること	平均	4.05	4.21	p<.05	2.11	女<男
	標準偏差	0.437	0.535			
家で出来る遊び(ゲーム・マンガ・本)をすること	平均	2.82	3.04	p<.05	2.01	女<男
	標準偏差	0.645	0.806			
現状ありうる程度		女性	男性	有意確率	t 値	差異
一人きりで遊ぶ	平均	3.25	3.63	p<.01	2.68	女<男
	標準偏差	0.941	0.837			
習い事などのやるべきことが決まっていること	平均	3.92	3.56	p<.01	2.78	女>男
	標準偏差	0.804	0.879			
放っておかれることが多い	平均	3.08	3.33	p<.05	2.15	女<男
	標準偏差	0.71	0.775			

③担任をする学年による教員意識の違い

以下に示す項目で担任をする学年による教員の意識において、有意な差がみられた。表3に示す。低学年担任の先生方は「遊んでいる時に大人が指示や禁止をすること」はあまり望ましいことではないし、実際に「大人が指示や禁止をすること」が現状ありうる程度も高いと考えていた。「大好きなテレビゲームをすること」についても、あまり望ましくはないと考えていた。

低学年を担任する教員はテレビゲームをして遊ぶより、友だちと一緒に外で体をうごかして遊ぶことが望ましいと考えているようであった。

表3 担任をする学年による教員意識の違い

望ましい程度		低学年	中学年	高学年	F 値	有意確率	多重比較	有意確率
遊んでいるときに大人が指示や禁止をすること	平均	2.02	2.25	2.46	3.57	p < .05	低学年 < 高学年	p < .05
	標準偏差	.758	.837	.894				
大好きなテレビゲームをして遊ぶこと	平均	2.15	2.52	2.54	3.91	p < .05	低学年 < 高学年	p < .05
	標準偏差	.691	.779	.797				
現状ありうる程度		低学年	中学年	高学年	F 値	有意確率	多重比較	
遊んでいるときに大人が指示禁止をすること	平均	3.34	2.90	2.88	4.15	p < .05	低学年 > 中学年 低学年 > 高学年	p < .05 p < .05
	標準偏差	.855	.823	.921				

2. 放課後の子どもの過ごし方、放課後の子どもの居場所、放課後子ども教室について

1) 「放課後子ども教室」や「放課後の子どもの居場所づくり」について教員はどれほど知っているのか

小学校の先生方は「放課後子ども教室」や「放課後の子どもの居場所づくり」についてどのくらい知っていて、どのようにとらえているのかを以下のように尋ねた。

質問項目：自分は放課後子ども教室についてよく知っている

結果は表4の通りであった。先生方は放課後子ども教室についてあまり知っていなかった。

表4 「自分は放課後子ども教室についてよく知っている」に対する回答

	人数	パーセント	累積パーセント
よく当てはまる	3	1.8	1.8
当てはまる	19	11.2	13.0
どちらでもない	45	26.6	39.6
あまり当てはまらない	52	30.8	70.4
まったく当てはまらない	50	29.6	100.0
合計	169	100.0	

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

「よく当てはまる」, 「当てはまる」の人数は22名(13%)であった。

質問項目：自分は、放課後の子どもの居場所づくりについてよく知っている。

結果は表5の通りであった。

表5 「自分は放課後の子どもの居場所づくりについて知っている」に対する回答

	人数	パーセント	累積パーセント
よく当てはまる	3	1.8	1.8
当てはまる	15	8.9	10.7
どちらでもない	52	30.8	41.4
あまり当てはまらない	53	31.4	72.8
まったくあてはまらない	46	27.2	100.0
合計	169	100.0	

現在、放課後の安全・安心な子どもの居場所として文部科学省が進めており、我孫子市でも第一小学校に放課後子ども教室を設立し、さらに他校にも進めようとしている放課後子ども教室や放課後の子どもの居場所づくりであるが、先生方にはあまり知られていないといえた。

2) 「放課後の過ごし方」に関する質問項目, 「放課後の子どもの居場所」に関する質問項目, 「放課後子ども教室」に関する質問項目の因子構造

「放課後の過ごし方」に関する質問20項目を対象とし、2因子を仮定して、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。因子抽出後の共通性が.200未満の4項目を除いて、16項目で再び因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。結果を表6に示す。第1因子は、「外で体を動かす遊びをすること」、「たくさんの子どもと一緒に遊ぶこと」などからなるので「能動的・動的活動」と命名した。第2因子は、「家でできる遊び(ゲーム・マンガ・本)をすること」などであったので、「受動的・静的活動」と命名した。

次に、「放課後の子どもの居場所」に関する質問35項目を対象とし、5因子を仮定して、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。因子抽出後の共通性が.200未満の5項目を除いて、30項目で再び因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、因子負荷量が.4未満であった3項目を削除して検討した結果、27項目が抽出された。

第1因子は、「公共の場所の提供は必要」、「学校施設の提供することはふさわしい」などからなるので「学校・公共・行政」と命名した。第2因子は、「しつけをする大人がいること」、「大きなケガや病気の時に大人がいること」などであったので、「安全な場」と命名した。第3因子は、「多少危険でもチャレンジできるものがあること」「大切なのは友だちと遊べること」な

表6 「放課後の子どもの過ごし方」の因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

質問項目	因子		
	1	2	
I 能動的・動的活動			
自分自身で遊びを創意工夫すること	.757	-.106	
別の学年の子どもと一緒に遊ぶこと	.637	-.011	
鬼ごっこなど伝統的な外遊びをすること	.604	.041	
外で体を動かす遊びをすること	.588	.037	
自分でどんどん新しい遊びを見つけること	.556	-.044	
お年寄りの話を聞く一緒に遊ぶこと	.551	-.058	
読書をする	.543	.064	
たくさんの子と一緒に遊んで遊ぶこと	.538	-.115	
初対面の子と一緒に遊ぶこと	.454	.113	
どんな遊びや活動をするか自由に決められること	.453	.088	
II 受動的・静的活動			
大好きなテレビゲームをして遊ぶこと	-.033	.713	
家で出来る遊びゲームマンガ本をすること	-.006	.657	
一人きりで遊ぶこと	-.022	.623	
他にいくところがなく家で遊ぶこと	-.204	.592	
大人の用意した活動をする	.082	.549	
授業の復習や学習塾などで勉強をすること勉強すること	.264	.459	
因子間相関	因子 I	因子 II	
	累積寄与率	25.34	43.15
	α 係数	.69	.76

どであったので、「友だち・チャレンジのある場」とした。さらに、第4因子は、「居場所にいることで保護者がより自由に就業できること」「子ども同士のけんかを仲裁する大人がいること」などであったので、「安心な場」、第5因子は「学校や自宅から離れていること」「繁華街の遊び場で集まること」などからなるので、「ふさわしくない居場所」とした。結果を表7に示す。

「放課後子ども教室」の質問項目17項目は、5因子を仮定し、主因子法（バリマックス回転）を行ったところ、因子抽出後の共通性はすべて.200以上であり、因子負荷量もすべて.400以上であった。そこで、5つの因子を抽出し、第1因子「必要性」、第2因子「知識」、第3因子「地域性」、第4因子「当事者の声」、第5因子「学童との連携化一体化」と命名した。因子分析の結果を表8に示す。

3) 【教職年数の短い教員と教職年数の長い教員】【男性の教員と女性の教員】【低学年教員と中学年教員と高学年教員】における因子別評定平均値の差異

先生方を【教職年数の短い教員と教職年数の長い教員】、【男性の教員と女性の教員】、【低学

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

表7 「放課後の子どもの居場所」の因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

質問項目	因子				
	1	2	3	4	5
I 学校・公共・行政					
公的な場所の提供は必要	.641	.203	.095	.193	.001
学校施設を提供することはふさわしい	.579	.232	-.106	-.001	.168
スタッフの役割が重要である	.569	.138	.067	.183	-.254
体験活動を通して情操豊かに育ってほしい	.535	.017	.103	-.018	.072
慣れ親しんだ校庭体育館図書館などの施設である	.532	.433	-.070	.051	.098
居場所づくりは行政がやるべきこと	.507	-.184	.119	.198	-.112
そこで行われる活動がポイントである	.482	.100	.091	.000	.017
地域の中に児童館的な機能をもつ居場所が必要	.474	-.247	.403	.123	-.165
学校は安心安全な居場所	.433	.052	.078	.260	-.028
大切なのは施設設備の良さである	.431	-.058	-.069	-.147	.006
II 安全な場					
しつけをする大人がいること	.092	.713	.089	.119	-.104
子ども一人ひとりの顔と名前を知っていること	.091	.660	.062	.218	-.037
大きなケガや病気のときに大人がいること	.106	.583	.143	.042	-.063
人生経験豊富な大人がいること	.026	.521	.288	.267	-.006
III 友だち・チャレンジのある場					
多少危険でもチャレンジできるものがあること	.046	.126	.534	-.010	.125
大切なのは友だちと遊べること	.284	.077	.518	-.090	-.157
ちょっとした子ども同士の争いがあること	.108	.120	.501	-.226	.165
どの居場所に行くか選択肢がたくさんあること	-.028	.155	.480	.042	.017
ひろい屋外にあること	.016	-.017	.455	.090	-.193
IV 安心な場					
子ども同士のけんかに仲裁する大人がいること	.031	.434	.196	.490	.040
保護者が子どもの成長について心配しないですむこと	.154	.148	.370	.488	-.057
居場所にいることで保護者がより自由に就業できること	.011	.124	-.005	.488	.076
勉強を見てくれる大人がいること	.152	.253	-.221	.487	.004
ケガをする可能性があるものは排除されていること	.111	.058	-.350	.466	.108
V ふさわしくない居場所					
学校や自宅から離れていること	-.097	-.016	-.022	.063	.713
繁華街の遊び場で集まること	.047	.014	-.060	.182	.546
子どもだけで大人がいないこと	.065	-.246	.072	-.139	.413
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V
累積寄与率	17.76	27.59	30.53	43.21	48.98
α 係数	.79	.75	.65	.64	.64

表8 「放課後子ども教室」の因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

質問項目	因子				
	1	2	3	4	5
I 必要性					
子どものシェルターとして必要である	.842	-.022	.067	.216	.108
良い試みなのでどの小学校でも行うべきである	.803	.013	.166	.044	.031
どの学年でも必要である	.749	.090	.102	-.011	.187
両親が働いていなくても必要である	.659	.107	.123	.025	.084
次代を担う子どもの育ちを支える重要な場所である	.619	-.037	.294	.176	.099
II 知識					
放課後子ども教室を知っている	.091	.971	-.032	-.087	.044
居場所づくりを知っている	.042	.914	-.062	-.048	.029
III 地域性					
地域の伝統文化を伝えたい	.047	.018	.823	.090	-.020
地域の大人と触れ合う機会となる	.377	-.047	.502	.095	-.056
地域独自の形や運営方法がある	.100	-.049	.492	.369	.042
現代の子どもにかけている生活技術を教えるべきである	.172	-.083	.455	.104	.074
週に何回かでのよい	.095	.017	.414	.105	.125
IV 当事者の声					
総合的評価には子どもの意見を聞くべきである	.086	.047	.129	.735	-.062
総合的評価には保護者の意見を聞くべきである	.071	-.166	.206	.676	-.051
総合的評価には教員の意見を聞くべきである	.102	-.033	.133	.641	.191
V 学童との連携一体化					
学童と子ども教室の一体化運営は必要である	.154	.040	.057	-.061	.874
学童との連携必要である	.162	.029	.106	.117	.759
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V
累積寄与率	26.88	41.36	51.06	60.10	68.17
α 係数	.87	.95	.70	.74	.82

年の担任の教員と中学年の担任の教員と高学年の担任の教員】の群に分け、群別・因子別の評定平均値を算出し、t 検定および分散分析を行った。

これらによると、教職の短い先生 (N=68) と教職の長い先生 (N=101) では、「放課後の過ごし方」のとらえ方で差がみられた。教職の短い先生方のほうが、「受動的・静的」な過ごし方は望ましくないと考えていた ($t(167)=5.55$, $p<.001$)。女性の先生 (N=99) と男性の先生 (N=70) を比較した場合、「放課後の過ごし方」については、男性の先生方のほうが、「受動的・静的」な過ごし方は望ましいことではないと考えていた ($t(120)=3.12$, $p<.01$)。また、「放課後子ども教室」については、女性の先生の方が「知識」が高く ($t(127)=3.17$, $p<.01$)、「当事者の声」を聞くべきと強く考えているのは男性の先生の方だった ($t(120)=2.20$, $p<.05$)。さらに、担任する学年の違いでは、放課後子ども教室についての「知識」の評定平均が低学年の先生は高学年の先生に比べ高かった。さらに、「放課後の子どもの居場所」では「ふさわしくない居場所」の評定平均値が、低学年の先生で高かった。図5から図7に示す。

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

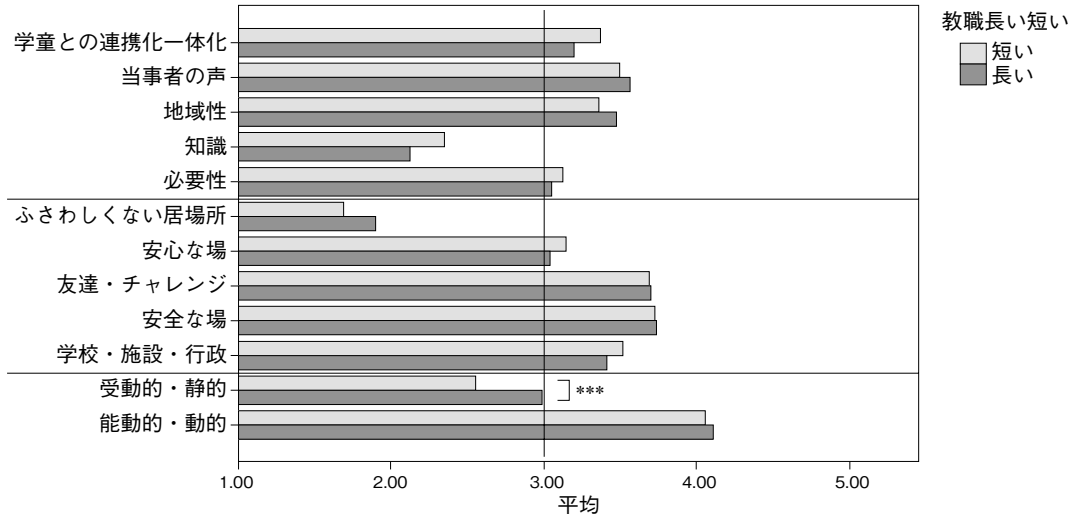


図5 教職の短い教員と長い教員の各因子の平均評価点

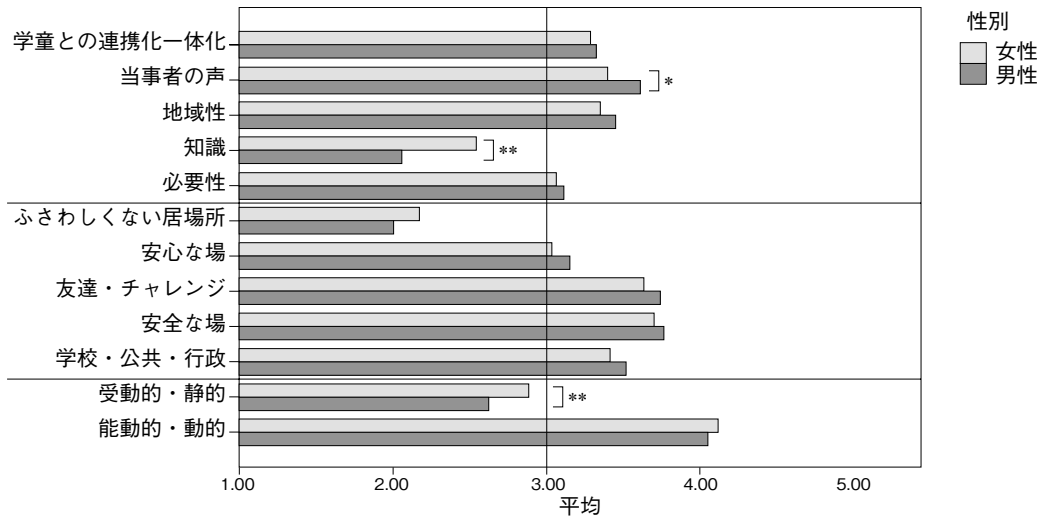


図6 男性教員と女性教員の各因子の平均評価得点

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

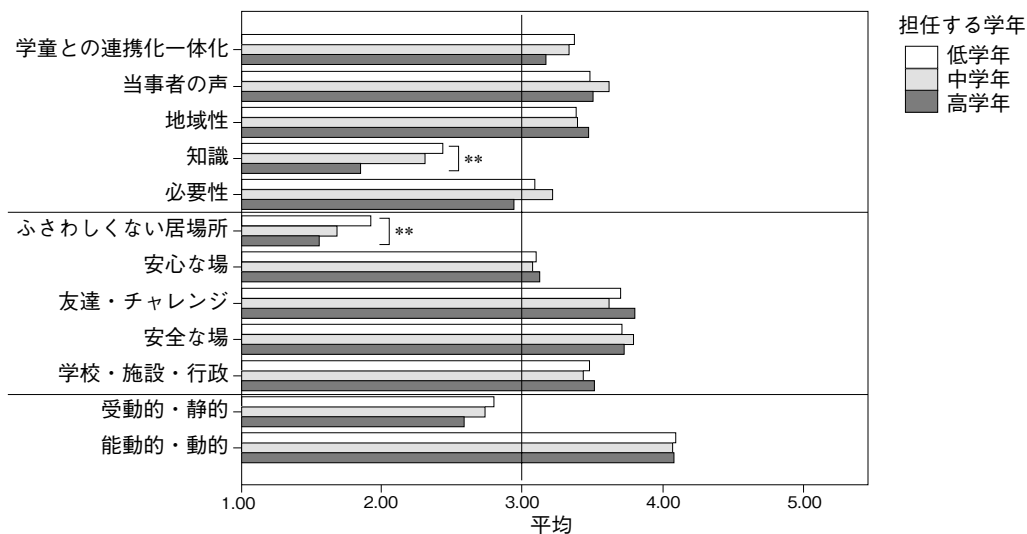


図7 担任する学年による教員の各因子の平均評価得点

4) 「放課後の子どもの過ごし方」「放課後の子どもの居場所」「放課後子ども教室」の関連性について

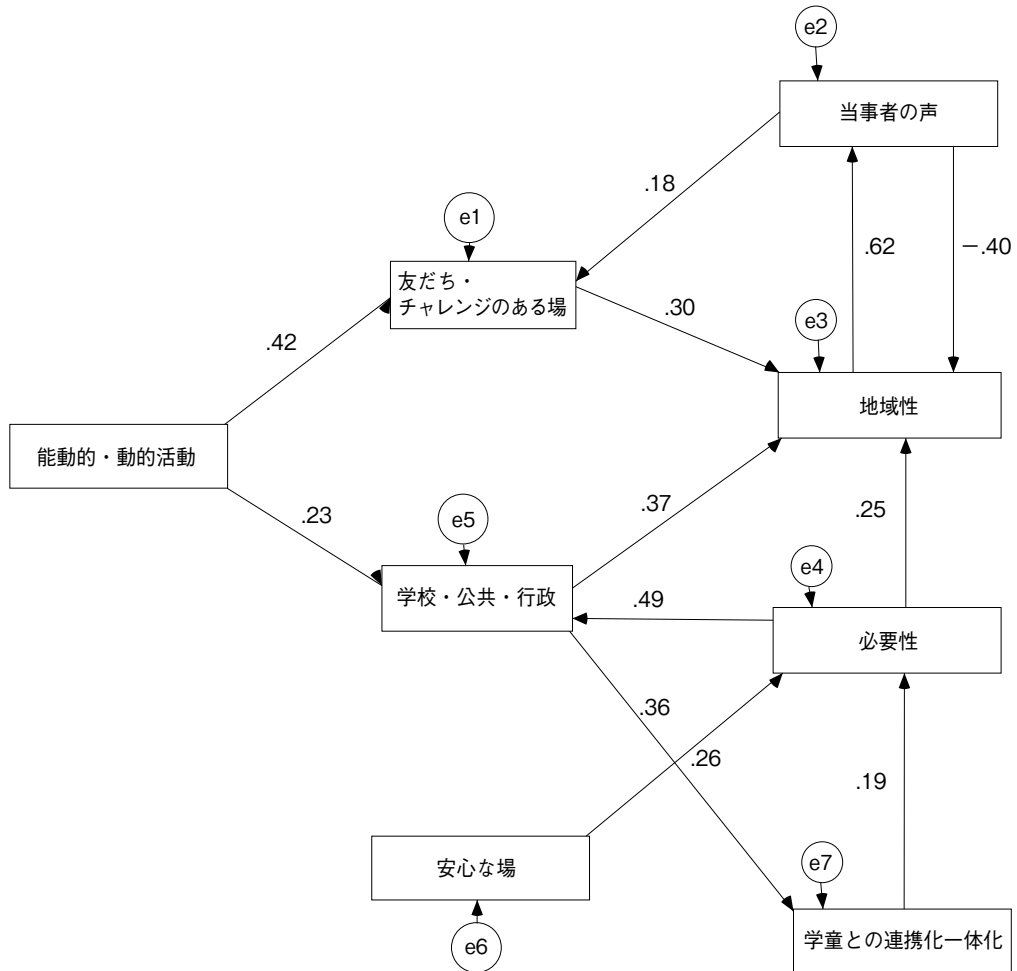
「放課後の子どもの過ごし方」「放課後の子どもの居場所」「放課後の子ども教室」の3者の関連性について、パス解析を行い、次頁に記すようなパス図を作成した。図8に示す。

これによると、放課後の子どもの過ごし方が「能動的・動的」であることが、放課後の居場所づくりに関連し、友だちと遊んだり新しい体験をしたりすることにつながり、地域にある学校や公共の施設での居場所づくりを必要とする。それは、「当事者の声」を反映したものでなければならないだろうし、学校施設を使うことで「学童保育室との連携化・一体化」につながるといえよう。もし、放課後の子どもの過ごし方が「受動的・静的」であり、一人で家においてマンガを見たりテレビゲームをするようなものであれば、子どもの居場所は家であり、学校や公共の施設を提供する必要はなくなる。

教員たちは今回の意識調査から放課後の子どもたちの過ごし方は「能動的・動的」であることを「受動的・静的」であることよりずっと望んでいたわけであり、社会性・コミュニケーションの発達にとっても、放課後子どもが他者とかかわる場にいることは大切なことであろう。今日、子どもたちにとってもう一つの学校である放課後の居場所の整備が求められているといえよう。これらのことが、このパス図から示唆される。

放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析

<放課後の子どもの過ごし方> <放課後の子どもの居場所> <放課後子ども教室>



GFI=1.000 AGFI=.999 NFI=1.000 RMSEA=.000

図8 「放課後の子どもの過ごし方」「放課後の子どもの居場所」「放課後子ども教室」の関連性

引用・参考文献

蓮見元子, 北原靖子, 川嶋健太郎, 浅井義弘, 2009, 「放課後子ども教室について児童の声を聴く—タッチパネル式パソコンを使って—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 20, 1, pp.141-157.
 川嶋健太郎, 北原靖子, 蓮見元子, 浅井義弘, 2009, 「放課後子ども教室における自己点検評価ツールと

- としてのタッチパネル式アンケート—学童保育室児童の声を聴く—, 『川村学園女子大学研究紀要』, 20, 1, pp.127-140.
- 蓮見元子, 北原靖子, 川嶋健太郎, 浅井義弘, 2008, 「放課後の過ごし方に関する児童へのタッチパネル式アンケート」, 『日本教育心理学会総会発表論文集』, (50) p.505,
- 川嶋健太郎, 北原靖子, 蓮見元子, 浅井義弘, 2008, 「放課後子ども教室利用についてのタッチパネルアンケート」, 『日本心理学会第72回大会発表論文集』, (50) p.1228,
- 北原靖子, 柴田恵江, 蓮見元子, 川嶋健太郎, 浅井義弘, 2009, 「放課後子ども教室に関わる大人たち」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 20, 1, pp.113-125.
- 北原靖子, 蓮見元子, 柴田恵江, 川嶋健太郎, 2009, 「「地域で子どもを育む」ために, 心理学は何ができるか」, 日本教育心理学会第51回総会自主シンポジウム S100-101.
- 杉本希映, 庄司一子, 2006, 「居場所の心理的機能の構造とその発達の变化」, 『教育心理学研究』, 54, 3, pp.289-299.